

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2013～2017

課題番号：25704013

研究課題名(和文) 靺鞨・渤海・女真の考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeology of Mohe, Bohai and Jurchen

研究代表者

木山 克彦(Kiyama, Katsuhiko)

東海大学・清水教養教育センター・講師

研究者番号：20507248

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北東アジアにおける古代から中世にかけての集団の統合、瓦解、再編の過程と周辺地域に及ぼした影響について、考古資料の検討から、実証的に跡付けることを目的とした。具体的には、靺鞨、渤海、女真を対象とし、各時代における地域集団の様相と交渉関係、次代への継承関係を考古学的に解明しようとしたものである。

ロシアを中心とした海外各研究機関に収蔵されている主に土器群を分析対象として、研究を実施した結果、各時代の土器群の概要を明らかにできたとともに、特に靺鞨の形成とその地域性に関して、従来の知見を超えた成果を上げることができた。

研究成果の概要(英文)： This study focused on the trace the process of consolidation, crushing, reorganization and influence on the surrounding area in the ancient and medieval groups in Northeast Asia archaeological data. Specifically, I focused on Mohe, Bohai, Jurchen and tried to elucidate the aspects of their regional groups in each era, the relationship of negotiations, and the succession to the next generation,

As a result of carrying out the research mainly on pottery collected in various research institutions mainly in Russia, I clarified the outline of the pottery group at each time and especially clarified the formation of Mohe and its locality from the view of pottery making.

研究分野：北東アジア考古学

キーワード：北東アジア考古学 土器研究 靺鞨 渤海 女真

1. 研究開始当初の背景

北東アジアでは、国家体制を築いた社会と狩猟採集社会との間、また国家内、集団内部において、直接的・間接的な交渉関係が重層的にみられる。当地域の歴史叙述は、在地集団自らの文字記録がなく、中国の史書を拠り所としてきた。その記録内容の重要性は疑いないが、分量が少なく、かつ中華思想の観点から記載されたものである為、当時の社会の実態や集団関係の動態を知る上で十分ではない。古代以来、数多現れた族集団と国家の内部構造や相互関係の実態、周辺地域に及ぼした影響を具体的に跡付ける為には物質資料からの検討が有効である。そして、各地域の物質文化に認められる共通性と差異の背景を、前代からの伝統、隣接地域や国家との関係、生産・流通網の変化等と関連させながら検討することで、当地域の歴史を具体的に描くことが可能となる。

6世紀頃、前代の諸集団を統べ極東全域に住地を広げた靺鞨族の成立は、古代における大きな社会変動である。その影響はサハリン、日本にも及びオホーツク文化の成立にも寄与した。この族集団による広域分布圏の確立は、その後の歴史展開の共通基盤となり、女真族、満州族にまで継続する。但し、靺鞨以来満州に至るまで一体の強固な集団ではなく、集団・国家内部にある地域集団が存在し、時期毎に集団間の関係性が変化しながら変遷を遂げたことが分かっている。共通基盤の端緒となる靺鞨においてさえ、7部の地域集団が存在し、その背景には前代の地域集団が存在したことが指摘されている。そして、この地域性が靺鞨南部では渤海国が成立し、北部では独自性を保ち続けた一因とされる。同様に女真成立期においても後の中核集団とその他の集団は対立関係にある。当地域の歴史研究は、主に東洋史の分野からなされてきた。しかし、上記の通り、史書のみでの分析では、無文字社会における実相は十分に明らかにできず、考古学的な分析を加味した総合的な検討が必要とされている。

考古学の分野では、資料の多くがロシアと中国にあり、その情報は限られてきた。しかし近年では、政治情勢の変化から実際に現地へ赴き分析しうる資料が飛躍的に増加している。当研究の対象となる各時期に関してもその詳細を検討できる態勢が整いつつある。申請者もこれまで幾つかの研究成果を提出してきた。靺鞨期に関する検討では、その斉一性と地域差を指摘し、地域差の背景に前代からの土器製作伝統を反映していることを明らかとした。また渤海土器の検討では地域差と土器の専門集団の有無から渤海領内における中心と周縁関係を指摘した。また北に位置するアムール女真文化の土器群の分析では、他地域と共通性の高かった土器群が、9世紀前半の渤海の侵攻や10世紀初頭の遼の侵攻を契機に変化し、独自の変遷過程を歩む様子を描き出し、渤海の瓦解とともに北

部集団からの影響が南へ及びぶことを指摘した。

本研究開始前に行ってきた研究代表者の研究で一定の成果を挙げたと考えているが、未だ見通しの段階となっている。資料分析の質をより充実させ、地域毎に資料の詳細を整理し、内在する時系列的な地域伝統と地域間を繋ぐ関係性を紐解き、歴史背景を加味しながら、地域集団の動向と地域間関係の推移を復元する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、北東アジアにおける古代から中世にかけての集団の統合、瓦解、再編の過程と周辺地域に及ぼした影響について、考古資料の検討から、実証的に跡付けることを目的とした。具体的には、靺鞨、渤海、女真を対象とし、各時代における地域集団の様相と交渉関係、次代への継承関係を考古学的に解明しようとしたものである。

この目的の為に、基礎的だが、ロシアと中国の各研究機関に蓄積され未公表となっている資料を分析し、さらに野外調査を実施して資料の時空間的な欠落を補っていく、着実な研究が求められる。

また本研究では、主に土器群を分析対象とした。これは広域な研究対象に対して、質・量ともに分析に耐え、かつ可塑性の高さから地域伝統の把握と地域間関係を捉えうる資料だからである。また、当地域では、他の考古遺物に対する検討を実践する上でも不可欠な広域の土器編年すら存在しないことが大きな問題であり、その確立が急務であるためである。

具体的には下記の点を明らかにすべく、研究を進めた。

(1) 靺鞨期における各地域における土器群の特性の抽出とこの段階における地域間関係の検討

(2) 渤海期における各地域における土器群の特性の抽出と渤海内の地域間関係の検討。

併行する北部靺鞨土器群の特性の抽出。の結果との比較を通じ、渤海との地域間関係の検討。

(3) 渤海滅亡から女真成立期における各地域における土器群の特性の抽出とこの段階における地域関係の検討。

(4) (1) ~ (3) の成果から、地域内の伝統と変化を抽出し、靺鞨成立から女真成立に至る地域間関係を推定する。また東洋史で蓄積された先行研究を加味しながら、当該期の集団様相と再編モデルを作成する。

(5) 6世紀代から11世紀代の中国東北部・ロシア極東にかけての広域編年の確立

3. 研究の方法

対象資料は、ロシアや中国で未分析・未報告となっている資料が多く、現地での資料調査が不可欠となる。

その為、海外収蔵機関に赴き、分析を行った。実施期間中に分析を加えた機関は下記の通りである（括弧内は対象資料の時期・文化名）。

- ・ロシア科学アカデミー極東支部（初期鉄器時代、靺鞨、渤海、ニコラエフカ文化、女真）
- ・極東連邦大学附属渤海研究センター、同附属博物館（初期鉄器時代、靺鞨、渤海）
- ・ロシア科学アカデミーシベリア支部（初期鉄器時代、靺鞨、アムール女真文化）
- ・サハリン国立大学（初期鉄器時代、オホーツク文化：靺鞨～女真併行期）
- ・ロシア科学アカデミーウランウデ支部（匈奴、鮮卑、ブルフォイトイ文化：靺鞨～渤海併行期）
- ・ブリヤート国立博物館（匈奴、鮮卑、ブルフォイトイ文化：靺鞨～渤海併行期）
- ・ブリヤート民族博物館（匈奴、鮮卑、ブルフォイトイ文化：靺鞨～渤海併行期）

尚、当初予定していた研究計画では、中国側の研究機関での資料分析とロシアでの野外調査を行う予定であったが、先方機関との調整を付けることができず、実施できなかった。その為、中国側の資料については刊行物を中心とした資料の渉獵を行い、ロシア側での資料分析との比較検討に切り替えた。この点は研究計画にもあった通りの次善策で対応した。

野外調査については、靺鞨・渤海併行期であり、靺鞨の西部境界と接する地域であるモンゴル東部国境周辺での調査を実施することにした。同様に当初研究計画にはなかったブリヤート共和国での資料調査も同じく靺鞨の西部境界の様相を検討するものである。当初研究計画の対象範囲を拡大であるが、当該地域の研究はほぼ未検討のまま残されている領域であること、極東地域との関連性は高く、以下に述べるように、その研究成果としては将来的な可能性を示すものとして十分なものであったと考えている。

尚、平成 28 年度は、当初研究計画 4 年間の最終年度であったが、先方機関との調整が付かず 1 年間休止した。研究期間を延長したが、最終的な研究計画としては、十分遂行できたと考えている。

4. 研究成果

本研究で得られた研究成果は、下記の通りである。まず対象とした靺鞨、渤海、女真の各時期の土器は、上記研究機関での資料分析の実施によって、各時期の土器群の特徴を明らかとすることができた。また編年についても凡その枠組みはできた。

靺鞨については、以下の点で顕著な実績を残すことができた。靺鞨の形成に関しては、ロシア沿海地方において前段階の初期鉄器時代ポリツェ 3 期からの移行形態であるブラゴスロベンノエ段階がアブラモフカ 3 遺跡で確認できた。この類型は、既にアムール流域において確認されていたものであるが、ロシ

ア沿海地方においては未確認であった。次のナイフェリト段階で極東全体が短期間のうちに齊一的になると考えられていたが、アムール流域と沿海地方においては、初期鉄器時代のポリツェ 3 期から同一の文化圏を形成し、連動しながら展開していくといえる。

また靺鞨の地域性と沿海地方における靺鞨から渤海にかけての系統性については、資料分析の結果から、土器群の地域的・年代的類型を認めることができ、従来の理解を深化させた。これらの成果の一部については、平成 25 年度に開催した国際シンポジウムや、そこでの報告と討論を基に自身の見解を提示するとともに、ロシア側の研究動向の紹介を纏めた（下記の研究成果（9）～（11））。またその後の分析成果も含め、靺鞨に関する土器からみたその地域性と、地域性を生む背景が形成以前の文化圏が係わっていることが推測できた。この成果については、最終年度となる平成 30 年にも国際シンポジウムで公表している（研究成果（5））。現在、発表時での討論を含め精査した上で論文として公開すべく作業を進めている。

渤海、女真期に関する研究では、各機関での資料分析を加えることにより、両時期の資料の具体的な内容を深めることができた。一方で、研究進展の結果、特に 10 世紀から 11 世紀代にかけての系統性や、アムール流域と沿海地方の地域間関係については、既存資料だけでは、十分に捉えることができないという課題にも直面する結果となった。この点は当初の研究計画の目標を達成できなかった点である（上記の目的（2）と（3）にあたる）。今後の野外調査による新資料蓄積によってのみ解決できる問題である。但し、本研究計画で得られた各時期的・地域的な特徴は、当該領域の研究の今後の基礎となるものであり、現在、分析内容を公開すべく作業を進めているところである。ロシア側の自国での調査も進展著しいため、本研究で得られた成果と新資料を加味して、今後上記の課題を達成する基礎としたい。靺鞨に関しては、当初の検討項目は達成できた。通時的広域的な編年についても大枠は作ることができた（上記目的（5））。

ロシアでの資料分析の実施は、当初研究計画で目的としていたもの以外の成果も齎した。ロシア及びモンゴル国における近年約 10 年間の研究動向を纏めたが、これも現地での調査過程で得られた情報を基にしたものである（研究成果（2））。またロシア沿海地方の資料実見の成果の一部として、同地方の靺鞨展開前にあたる青銅器文化の現状について纏め、公表した（研究成果（1））。靺鞨併行期に関しては、より広い範囲も視野に入れることができた。大陸での靺鞨の成立・拡大は、サハリン～北海道オホーツク海沿岸に展開したオホーツク文化に影響が及ぶことが知られている。同文化の有孔砥石を集成・実見する中で、同資料の類例が大陸部に存在す

ること、大陸からの招来品である可能性に思い至った。その為、沿海地方、サハリンの上記機関において、同地域で有孔砥石が出土する青銅器時代から中世までの資料を実見・分析し、オホーツク文化の有孔砥石は大陸の文化から(靺鞨文化成立期か?)の招来品であること、また靺鞨の影響が減じ、本州の影響が増大するとともに同資料がなくなることも指摘し、靺鞨とオホーツク文化の交渉関係の推移に新たな知見を提示した(研究成果5、(4)(7))。国内学会、国際ワークショップで発表したが、現在論文化に向けて作業を進めている。

尚、ロシア沿海地方の渤海期に関する資料分析は、モンゴル国での研究代表者の契丹に関する調査でも生かされている。渤海は10世紀代初頭に契丹に滅ぼされるが、その後渤海の遺民は、契丹領内各地に配される。史書の記載によれば、モンゴルの国境防衛の拠点となる城にも連れていかれる。この一つが研究代表者の調査地であるチントルゴイ城である。この遺跡の土器窯の調査から、その土器の特徴に渤海の徙民痕跡を見出すことができる可能性を指摘し、発表を行った(研究成果(3)(8))。

モンゴルなど草原地域と本研究の極東地域は、その生態系の違いから生業が異なる為、一見すると集団や歴史展開が異なるが、隣接地域となっており、密接な関係を有している。上記の例は一例である。本研究遂行中にその重要性を認め、靺鞨の西限地域と更に西方にある諸文化との関係について検討範囲を広げることとした。平成27年度では、モンゴル及びロシア・ブリヤート共和国での資料分析を行い、平成29年度はモンゴル東部国境(靺鞨の西部境界)地域での調査を実施した(研究成果(6))。結果、靺鞨や渤海と併行の囲壁を有する基壇遺跡を発見した。当該地域は、古代から中世においても国境となっているが、北魏の中心となる拓跋鮮卑やモンゴル帝国の蒙兀室韋の故地でもあり、北東アジアの歴史でも重要地のひとつである。ここに唐代併行とみられる遺跡が発見できた意義は大きい。今後、当該地域の在地集団であるブルフォトイ文化と国家との関係、更に東に隣接する靺鞨との関係を検討する予定である。

一時休止があったものの、研究は概ね順調に進展したと考えている。但し、これまでの研究で蓄積できた成果の公表も随時行ってきたが、やや遅れ気味とも考えている。その為、資料分析の成果については、今後、なるべく迅速に引き続き公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

(1) 木山克彦「ロシア沿海地方の青銅器時代」『季刊考古学』135号、48~50頁、雄山

閣(2016,5)査読無し

(2) 木山克彦「北東アジア」『日本考古学年報』66、79~85頁、一般社団法人日本考古学協会(2015,5)査読有

〔学会発表〕(計 8件)

(3) Kiyama Katsuhiko and Usuki Isao The features of Kiln of Xiongu and Kihitan in Mongolia. *SEAA 8*. Nanjin University, 10th June 2018

(4) Yamaya Fumito and Kiyama Katsuhiko The perforated whetstones in the Okhotsk culture. *Мультидисциплинарные исследования в археологии : пространственная археология*. ДВО-РАН. Владивосток. 14 мая 2018

(5) Kiyama Katsuhiko Archaeology of Mohe-Medieval archaeology in Far East Asia. *The 5th Workshop of Biological Anthropologists*. Institute of Archaeology, University of Oxford, 23rd March 2018

(6) 笹田朋孝・木山克彦・L.イシツェレン・G.マルガドエルデネ・白石典之「モンゴル国東北部オルズ川流域の2017年度踏査報告」『第19回北アジア調査研究報告会』43~46頁、北アジア遺跡調査報告会実行委員会編(東京大学 2018,3.10)

(7) 山谷文人・木山克彦「オホーツク文化の有孔砥石について」『第16回北アジア調査研究報告会』59~62頁、北アジア遺跡調査報告会実行委員会編(東京大学 2015,2.22)

(8) 木山克彦「契丹の北西辺防の様相:チントルゴイ城址の調査」『第38回 龍谷大学 東洋史学研究会』(於 龍谷大学 2014,6.6)

(9) 木山克彦「ポリツェ文化~靺鞨文化初期の土器資料調査」『第15回北アジア調査研究報告会』73~76頁、北アジア遺跡調査報告会実行委員会編(札幌学院大学 2014,3.1)

(10) 木山克彦「ポリツェ文化から靺鞨文化への土器変遷」『紀元1千年紀前半の極東:挾婁・濊貊・靺鞨』於 札幌学院大学 江別(2013,12.15)*共催の国際研究ワークショップ

〔図書〕(計 1件)

(11) 白杵勲・木山克彦編著『ロシア沿海地方の初期金属器時代』札幌学院大学(2014,3)全73頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者 木山 克彦(KIYAMA、Katsuhiko)

東海大学・清水教養教育センター・講師
研究者番号:20507248